

教員氏名：栗山 宣夫（保育学科／教授）

1. 教育の責任（何をやっているか）

保育学科に所属し、主に病気や障害に起因する特別な教育的ニーズのある子どもの保育・教育について学ぶ授業及び施設実習に関する授業を担当している。また、近年の学生の実態から、キャリアデザインⅠや保育実習指導Ⅰ（施設）や日常的な指導において、文章や地図の書き方などの基礎学力的な指導の時間が年々増えつつある。研究の専門領域である特別支援教育・病弱教育については群馬大学、文教大学、立正大学などで非常勤講師として授業を担当するとともに、学会や研究会を通して若手研究者の育成をおこなっている（日本特別ニーズ教育学会・研究委員会若手育成担当理事、全国病弱教育研究会副会長など）。東京学芸大学などでも非常勤を担当した経験もあるが、近年の特別支援教育の広がりから依頼を全て受けることは困難なため、近県のみ限定して活動している。クラブは手話部の顧問をしており、手話だけではなくろう文化の理解も促している。「専門ゼミ」では、自分の専門領域、指導できる範囲内であれば、その年度のゼミ生の興味関心を尊重した取り組みをおこなっているため、ほぼ毎年、違う活動となっている。その他、オムニバスで「子どもと人間関係」「保育・教職実践演習」「ユニバーサルコミュニケーション」を担当している。

2. 教育の理念（なぜやっているか）

現場の子どもの育ちに帰するために教育をおこなっている。現場の子ども自身の発達を適切に援助しようとする姿勢と技量を身に付けた（身に付けようとする）保育者・教師を育成するために教育をおこなっている。

3. 教育の方法（どのようにやっているか）

子どもの内面に葛藤が起き、それを子ども自身が解消しようとする時（わかろうとする時）に、子どもの脳（主に前頭前野）が発達するという科学的根拠から、その際の適切な援助ができる支援者になれるように学生が育っていく必要があると考えるが、学生自身が「わかる」ということ（上記のような意味で）を体験してきていない、実感できていないケースが本学の学生の場合、非常に増えてきている。そこで、まずその体験を促すこと

を、特に1年次と専門ゼミでは留意して取り組んでいる。勉強とは「よくわからないこと」「つまらないこと」を忍耐強く覚えていくことという、本来の学びやわかりとは逆行した教育観しか知らない、学ぶことのおもしろさやわかるということの意味を知らない学生が多い。ここからの脱却をはかるべく、覚えさせられる授業ではなく悩み、考え、わかったという実感のもてる授業をまずは体験させたいと工夫を凝らしている。

4. 教育の成果（行った結果どうだったか）

上記のような経験を経た学生は、子どもに「こういうふうに思いなさい」と頭ごなしの指導をしなくなる傾向が高いのではないかと考える。その子どもの悩み具合、わかり具合を読み取り、子ども自身が葛藤し、それを消化していきやすいような援助ができる（少なくとも援助をしようとする姿勢を身に付けた）保育者・教師に育つのではないだろうか。学生自身が「わかる」を構築するような活動を比較的行いやすい専門ゼミを経た卒業生の様子を鑑みると、そのような成果があるのではないかと感じている。

5. 教育における今後の目標（これからどうするのか）

保育者、教師が本来の学びを実感していない状態で保育や教育活動にあたっていると、子どもの成長にとってふさわしくないだけでなく、不適切な教育観の再生産に繋がってしまう。その意味で、県内で最大数の保育者を現場に提供している本学保育学科の役割は大きい。現在、担当している保育キャリアアップ研修や特別支援学校教員免許認定講習など現職教育の機会を活かすとともに、本学保育学科での保育者養成において、上記の目的や方法を諦めることなく貫き、少しでも現場の子どもの育ちに今後も寄与していきたいと考えている。

(2024年7月31日現在)